

「イスラーム神学」が指すものとは

「イスラーム神学」という語が用いられるとき、多数派であるスンナ派のそれを指しているのか、少数派であるシーア派のそれを指すのか、あるいは幅広く両者を指しているのかはしばしば判然としない。一般的には、筆者を含めた多くがスンナのなかでも特にアシュアリー学派に基づいた神学を指して概説的に話しているように思われる。スンナ派におけるイスラーム神学を理解することですら難しいのに、ましてやイスラームにおける神学の全体像を理解することはほとんど不可能である。

日本におけるイスラーム神学の説明は、このアシュアリー学派の説明を中心に構成されてきた。しかしながら、スンナ派ではマートウリーディー学派 (al-Māturīdīyah) が、アシュアリー学派と並ぶ二大神学派として認識されている。

さらに、「ハディースの徒」(ahl al-hadīth) もまた、サウジアラビアやイスラーム国 (IS, Islamic State) などの現代イスラームを理解するうえで重要な神学的潮流である。キリスト教神学についての議論であれば、高校世界史の教科書にも登場する一方で、イスラーム神学についてはほとんど知られていない。

今回は松山洋平著『イスラーム神学』を取り上げ、イスラーム神学における神学的命題について考察する。

#### 神学派の特徴

アシュアリー (874 ~ 936 年) が創始したアシュアリー神学派に対して、マートウリーディー (853 ~ 944 年) が創始したマートウリーディー神学派は、スンナ派の四大法学派の一つであるハナフィー法学派の神学としての役割を果たしてきた。前回、アシュアリー神学派に所属したガザーリーを考察した際に、イスラーム神学に対するイスラーム法学の優先性について触れた。アシュアリー神学派はシャーフィイー法学派との結びつきが強く、マートウリーディー神学派はハナフィー法学派と結びついた。こうした神学と法学の布置は地理的分布に対応していると言ってよいものであろう。シャーフィイー法学派はエジプトや東南アジアを中心に広がり、ハナフィー法学派はトルコや南アジアを中心に広がっている。すなわち、それぞれの地域にアシュアリー学派とマートウリーディー学派が展開したのである。

一方で、ハディースの徒については、イブン・ハンバル (780 ~ 855 年) によって創始されたハンバル法学派と結びついた。このハンバル法学派に所属したのが、イブン・タイミーヤ (1263 ~ 1328 年) であり、彼から影響を受けたのがワッハーブ主義やサラフィー主義である。松山によれば、マートウリーディー学派は、ハディースの徒と比べると、アシュアリー学派と神学的に近い見解を取ることが多いという。

#### 「一なる者」をめぐる神学的見解

「タウヒード」(tawhīd) という語は、神を唯一なる存在と認めることを意味する。この語は、イスラームの信仰生活の中心を成す語であるが、アシュアリー学派とマートウリーディー学派の見解では、タウヒードには以下の3つの側面があるという。

①本体におけるタウヒード (tawhīd fi al-dhāt)

②行為におけるタウヒード (tawhīd fi al-af'āl)

③属性におけるタウヒード (tawhīd fi al-sifāt)

①については、神があらゆるかたちで分割を受けない一なる者であること、②については、神はあらゆる行為を望むままに行うことができる者であること、③については、神は「神」以外の属性で説明される者ではないことがそれぞれ述べられる。アシュアリー学派に所属する神学者たちのうち、イスラーム神秘主義 (スーフイズム) にも携わったスーフイーたちは、これら3つの側面を神秘主義に援用して論じている。

それに対して、ハディースの徒は以下の3つを主張する。

①主性におけるタウヒード (tawhīd fi al-rubūbiyah)

②神性におけるタウヒード (tawhīd fi al-ilāhiyah)

③属性におけるタウヒード (tawhīd fi al-sifāt)

これら3つに関して、①については、神以外に創造主はいないこと、②については、神が崇拜対象であり終末における審きの主宰者であること、③については、人間をはじめとした被造物とは異なる諸属性を通して神を形容することが述べられる。

ここに生まれる両者の違いに関して、アシュアリー学派とマートウリーディー学派は思弁神学的に議論を構築するのに対して、ハディースの徒は預言者ムハンマドの言行録を論拠とした議論を展開する。例えば、イブン・タイミーヤは以下のように主張する。アシュアリー学派やマートウリーディー学派は、神がすべてのものの創造主であることを「神性」と捉える。しかし、多神教徒であっても神が創造主であることを認めるため、この考えは誤りである。「世界の創造主であるということは、多神教徒であっても認めうる『主性におけるタウヒード』を示すのみで、『神性におけるタウヒード』を帰結するわけではない<sup>(1)</sup>」からである。

#### 神学は必要か

自らもムスリムである松山は、「あとがき—神学のすすめ」と題してイスラームにおける神学の重要性を述べている。彼は、「神学はむずかしいので、まだ自分には必要ない」と述べたり、ムスリムか非ムスリムであるかにかかわらず、「クルアーンとハディースを読めば十分である」と主張したりする人に出会う。曖昧で多義的に読むことができるクルアーンの一節や、真偽や選定の背景を理解しないままハディースを読むことで、本当に信仰的に十分かと言えばそうではない。信仰を深め、クルアーンやハディースについての膨大な議論や方法論を拾い上げることで、「正統な信条」を導き出すことが神学という営為である。

この議論は天理教の信仰にもそのまま当てはまる。三原典を読むだけで果たして十分だろうか。言葉の背景や意味を深めていくうえでも、天理教学を学ぶ必要がある。

#### [註]

(1) 松山洋平『イスラーム神学』作品社、2016年、189頁。この著作は日本においてイスラーム神学に本格的に取り組んだ初めての著作である。